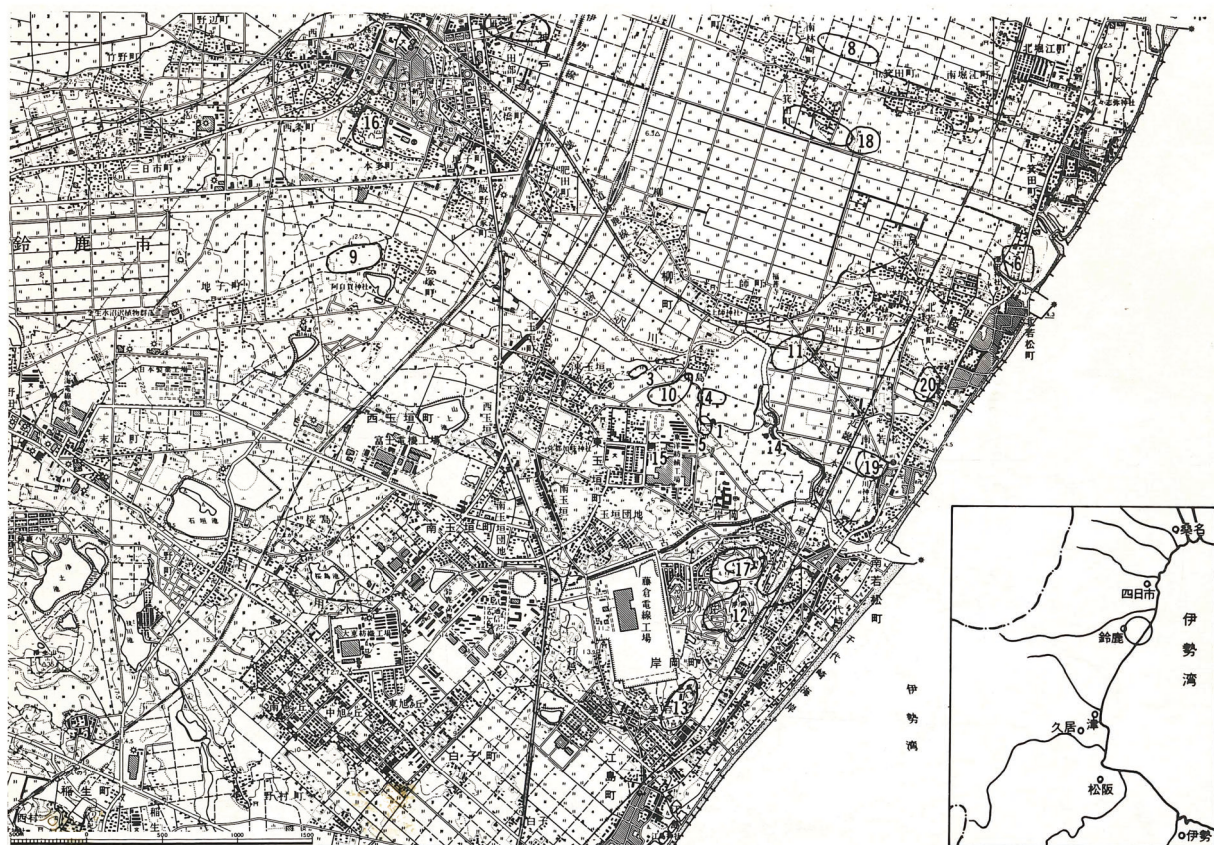


昭和52年度県営圃場整備地域
埋蔵文化財調査報告 1

鈴鹿市岸岡町 塚越3号墳



1978・3

三重県教育委員会

I 前 言

三重県教育委員会は、例年実施される県営圃場整備事業について、県農林水産部耕地第二課と年度当初より再三協議を重ね、遺跡の現状保存に努めている。昭和52年度の事業地内においても多くの遺跡の保存あるいは事前調査の実施について協議された。鈴鹿市安塚地区内でも、塚越古墳群及び双ツ塚遺跡がその対象とされたので、昭和52年10月、四日市耕地事務所と県教育委員会文化課は、現地において遺跡の現状確認を行なった。

塚越古墳群は、1号墳(県遺跡番号241)・2号墳(同242)として、2基が既に登録されている。1号墳は鏡等を出土したとされるが、既に消滅している。また、2号墳は東洋紡績工場地内に現状保存されている。この他、付近一帯には古墳状の盛土がいくつか認められたが、それが古墳であるか否かについては、形態状疑わしい点もあった。その為、事業地内に含まれるものについて、とりあえず、試掘調査を実施することに決定した。

試掘調査は、10月下旬にA～Dの4地点で実施した。調査の結果、A～C地点の高まりは、後世の盛土によるものと判明したが、D地点では、断面に主体部とおぼしき掘込みを確認したので、本調査の必要性を県農林水産部耕地第二課へ通知した。協議の結果、本調査を実施することとなり、三重県教育委員会が主体となり、昭和52年11月7日から同年11月11日にわたって約300㎡の調査を実施した。本調査により古墳であることが明確になり、これを塚越3号墳として報告することにした。

また、古墳調査中に、古墳西方の畑を貫く仮用水路断面に遺構の存在を確認し、付近の畑一帯



塚越3号墳航空写真

にも土器の散布が認められたので、これを塚越遺跡と称することにした。塚越遺跡については、早速、県農林水産部耕地第二課と協議し、水路部分において3ヶ所の試掘調査を実施した。遺跡の範囲は、東西140m×南北150mに及ぶものであり、弥生時代後期以降を中心とするものである。協議の結果、盛土して保存することとなった。

調査にあたっては、四日市耕地事務所並びに地元改良区各位の協力を得た。特に、四日市耕地事務所には、航空写真や現況図面の提供等、種々にわたって御配慮頂いた。関係者各位に謝意を表したい。

II 位 置

鈴鹿山脈に源を発する鈴鹿川は、いくつかの支流をあつめ、肥沃な鈴鹿平野を形成し伊勢湾に注ぐ。この鈴鹿平野は、地形分類上5つに区分される^①。その中では河田町を頂点とする三角州性扇状地が最も広大な面積を占める。三角州性扇状地の北側では三角州が発達し、扇端にあたる東側には海岸平野が伊勢湾に並行して伸び、南側では旧鈴鹿川が形成した低位段丘が広がる。

塚越3号墳(1)は、低位段丘と三角州性扇状地が複雑に入り込む標高6m前後の低位段丘上に立地する。行政上は、鈴鹿市岸岡町字塚越に属す。次に、各時代の遺跡を立地の点から眺めてみる。

低位段丘あるいは三角州性扇状地に発達した自然堤防上には、沖積地をとり囲むように弥生時代以降の遺跡が分布する。それらは神戸中学校遺跡・萱町遺跡・須賀遺跡(2)・深田遺跡(3)^②・双ツ塚遺跡(4)^③・塚越遺跡(5)・北若松遺跡(6)・上箕田遺跡(7)^④・上箕田北遺跡(8)等であり、



塚越3号墳調査後近景(南西より)



遺跡地形図 (1:5000 鈴鹿都市計画平面図 66)



調査区域図 (県営ほ場整備事業安塚地区 岸岡第2及、中島 I B 1:1000)

低位段丘や自然堤防と沖積地との接点に立地している。しかしながら、三角州の南端にあたる唐木～長太を結ぶ自然堤防上には、遺跡が確認されておらず、この頃鈴鹿川流域の沖積化が依然として進んでいたことがわかる。上箕田遺跡・須賀遺跡では、弥生前期以降の土器を出土するが、他の遺跡は、弥生後期以降の土器を中心に出土する遺跡であり、弥生後期以降多くの集落が拡散していったことが推察される。

これらの遺跡の多くは、次の古墳時代へと経続して営まれていくが、安塚遺跡(9)・双ツ塚西方遺跡(10)・土師南方遺跡(11)^⑤のように古墳時代を中心とする遺跡も現われる。近年新たに発見される遺跡も多く、この地域では今後とも大小の遺跡が確認される可能性をのこしている。ところで、古墳時代には、平野面に孤立する岸岡山丘陵に前方後円墳2基を含む岸岡山古墳群(全28基・12)・前方後円墳1基を含む愛宕山古墳群(全2基・13)が築造され、また、平野部にも画文帯神獸鏡等出土したと伝えられる塚越1号墳(14)^⑥・塚越2号墳(15)等がつくられてくる。また、深田遺跡でも円筒埴輪片とともに古墳の周溝かと思われる溝が検出されているなど、古墳立地として極めて対照的である。

肥沃で広大な鈴鹿平野は、弥生時代以降水田化されてき、奈良時代頃には条里地割がしかれる。三角州性扇状地には、ほぼ全域に一つのまとまった条里地制が認められるが、金沢川流域で条里は乱れる。歴史時代の遺構・遺物は、前掲の遺跡のいくつかで複合して確認されている。また、今日の集落が条里集落として発達してきたものであり、立地的には古代・中世期の集落と重なっていることも充分考えられる。

中世では、関氏五家の一つ神戸氏が拠った神戸城(16)をはじめ、岸岡城(17)・上箕田城(18)・若松城(19)・若松南村城(20)が点在する。



塚越3号墳調査後近景(北より)

III 遺 構

1. 墳 丘

調査前では、長径約10m・短径約8m・高さ約2.3mの円卓状を呈しており、南半部の崩れが甚だしく古墳として判別できないほど荒れていた。東西方向に設定したトレンチにより、盛土内に主体部と思われる掘込みを確認した為、調査に着手した。調査の結果、古墳の封土として考えた盛土は、後世2回ほどの土砂の堆積により、現在の形状を示していることが判った。

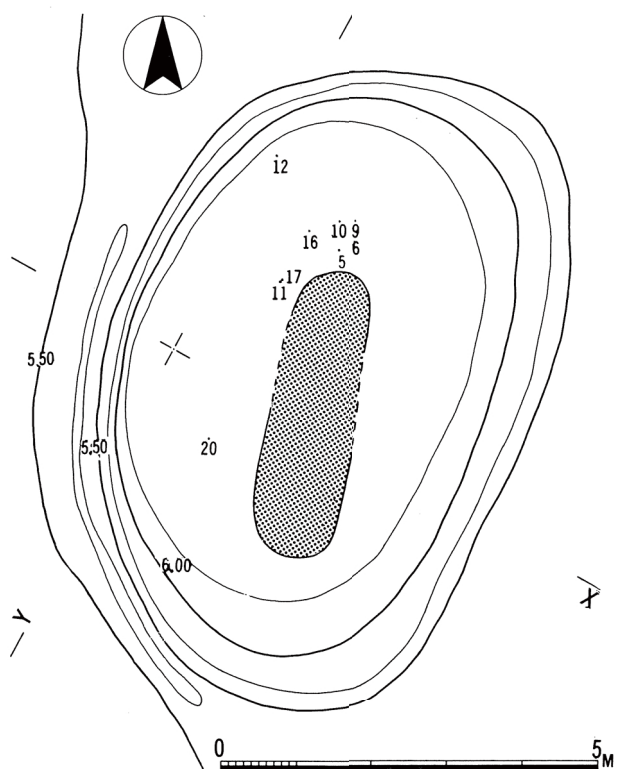
墳丘は、Ⅰ層——赤褐色粘土(地山)・Ⅱ層——茶褐色粘質土と黒色腐植土(旧表土)上に盛土したものである。Ⅲ層——墳丘盛土は、旧表土を含む為、全体に黒ぼく暗茶褐～暗赤褐色を呈する粘質土からなり、ほぼ水平に盛土される。また、周辺に集落址の存在も確認されており、盛土内にも土師器・須恵器片の混入が認められる。Ⅲ層までが古墳の旧状を示すもので、墳丘規模は、長径8.5m・短径6mの楕円形を示し、高さ1.5m以上のものである。

Ⅲ層上層には、盛土東半に近代の瓦片・染付茶碗を出土するⅥ層——黄茶～黒茶色粘質土(後世盛土①)が盛られ、更にその上層に西半分を中心に周辺の地山を削りとり盛ったと考えられる。遺物を含まないⅦ層——黄褐～赤褐色の粘質土(後世盛土②)が盛られ、現在の形状を呈していた。

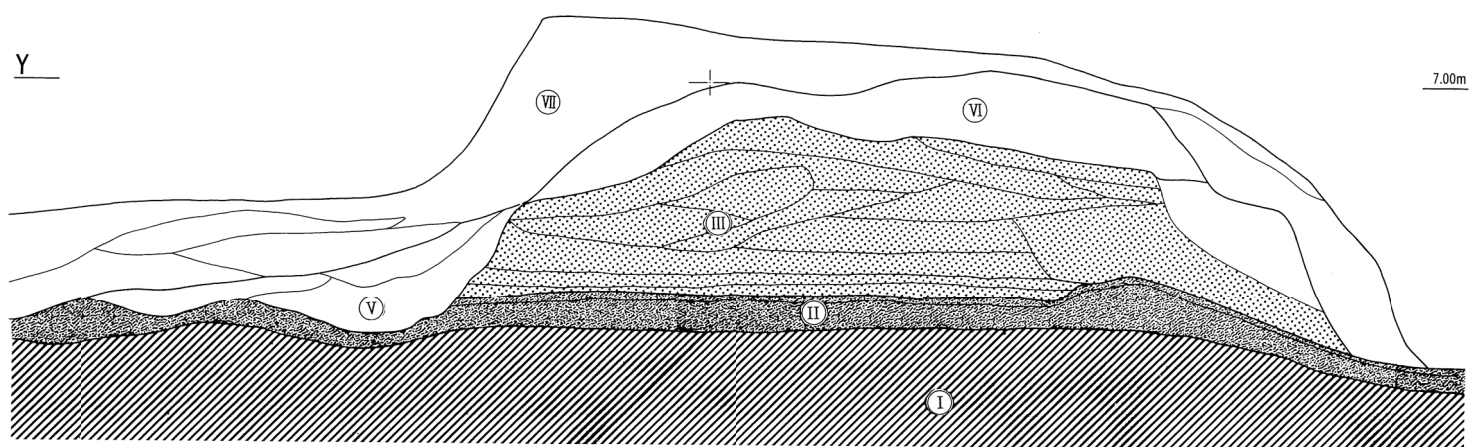
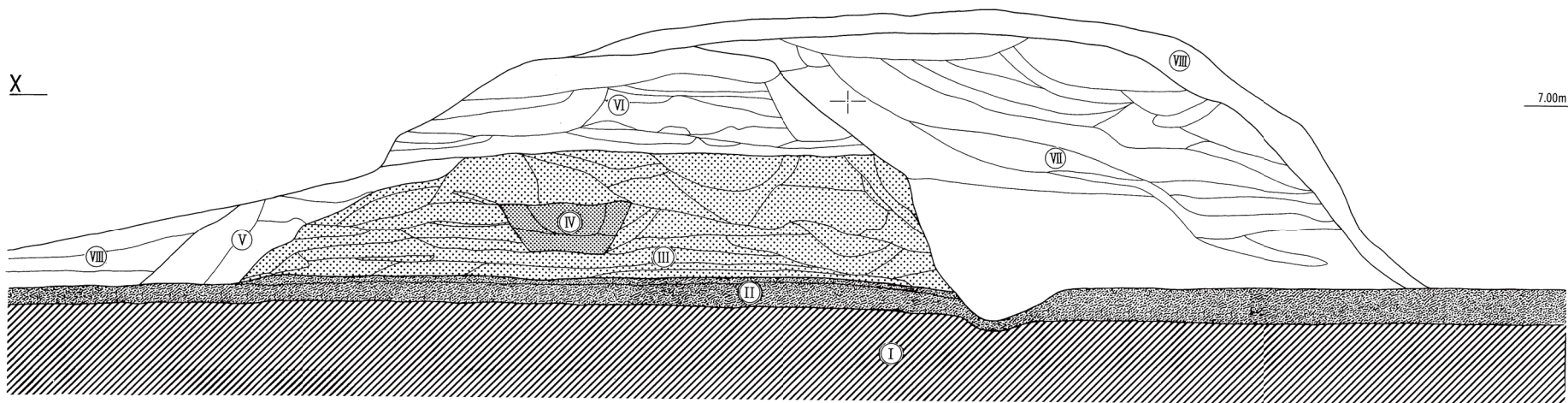
2. 主 体 部

主体部は、長さ3.85m・幅1.15m・深さ0.5mの墓坑中央の長さ3.2m・幅0.7m・深さ0.15mの木棺跡と推定されるもので、その長軸はN10°Eを示している。これらは墳丘のほぼ中央に位置し、現存墳丘下0.4mにつくられる。墓坑内には茶色粘質土を充満した後、遺体を安置したものと思われ、遺体あるいは木棺は直接墓坑の底面に接しない。遺体を安置したのち、封土を築成したと考えられるが、その様相は鮮明でない。また、墓坑内からは、副葬品の出土はみとめられなかった。従って、主体部としてやや疑問をもったが、墓坑としての掘込みが明瞭であったため、主体部と判断した。

墓坑の天端と同一レベルの西側には、長さ1m・幅0.5mのほぼ長方形に小石が薄く敷かれ、その西に長径70cm・短径45cmの大きな石が1個おかれていた。この小石敷付近より土師器碗(20)がほぼ完形で出土した。遺体埋葬時における儀礼的な場所であるかもしれな



調査後墳丘実測図 (1:100)



- Ⅰ 地 山
- Ⅱ 旧 表 土
- Ⅲ 墳丘盛土
- Ⅳ 主体部埋土
- Ⅴ 墳丘流出土
- Ⅵ 後世盛土①
- Ⅶ 後世盛土②
- Ⅷ 表 土

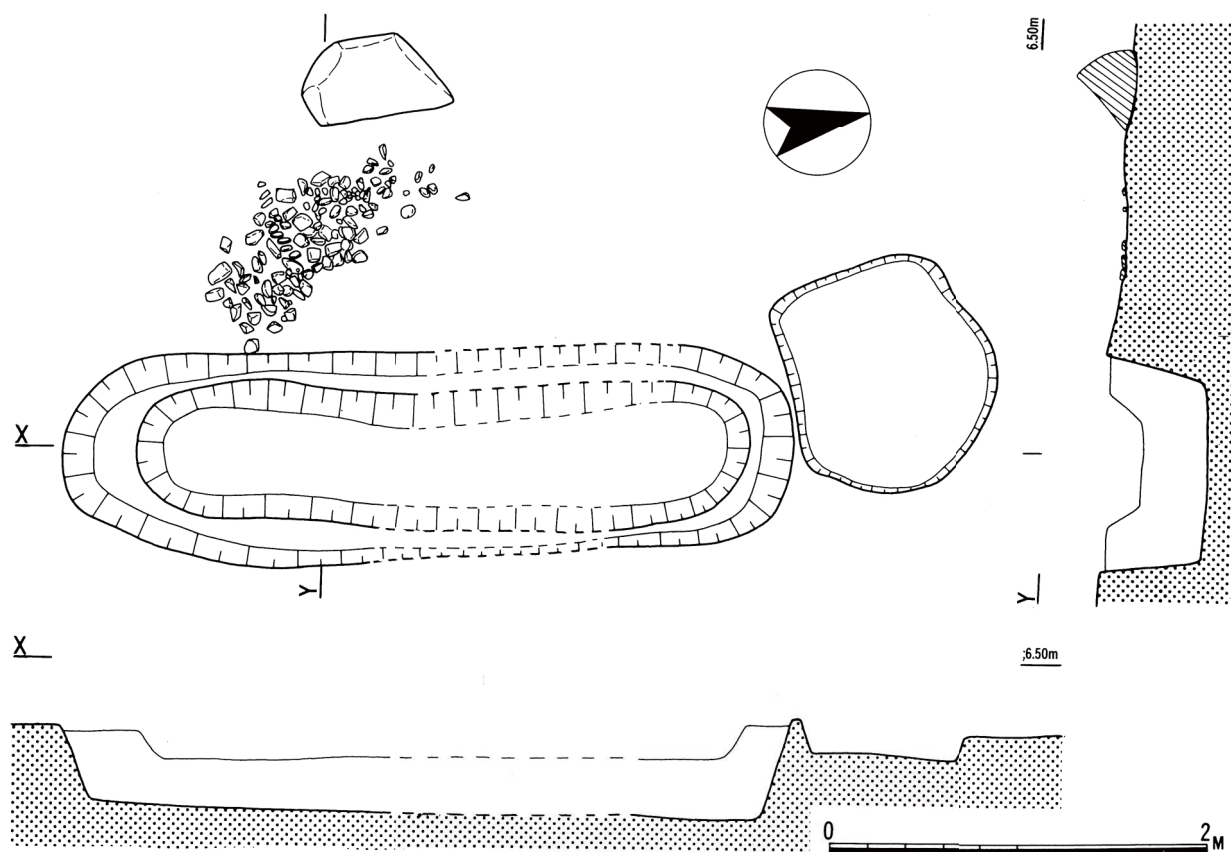
0 2 M

墳丘断面図 (1:50) 東西断面図／南北断面図

い。また、墓坑の北側に $1.2\text{m} \times 1.0\text{m}$ の不整形で深さ 15cm ほどの浅い土坑を検出した。

3. 周 溝

周溝は、古墳の西側から南側にかけて長さ約 7m にわたり検出推定することができた。幅 $0.9\text{m} \sim 1.4\text{m}$ ・深さ 0.3m の浅いもので、その掘込みは、II層——旧表土内にとどまり、I層——地山まで達していない。



主体部実測図 (1:40)



主体部調査後 (南東より)

IV 遺 物

1. 須 恵 器

杯蓋 (1~3) 1・2は口径13.5cm前後、3は口径約13cm。天井部は偏平である。天井部と体部をわける稜線は、小さな段をつくる。口縁端面は、内傾する端面をもつもの(1・2)と、丸くおさまられるもの(3)がある。1・2は暗青灰色、3は黒色を呈す。

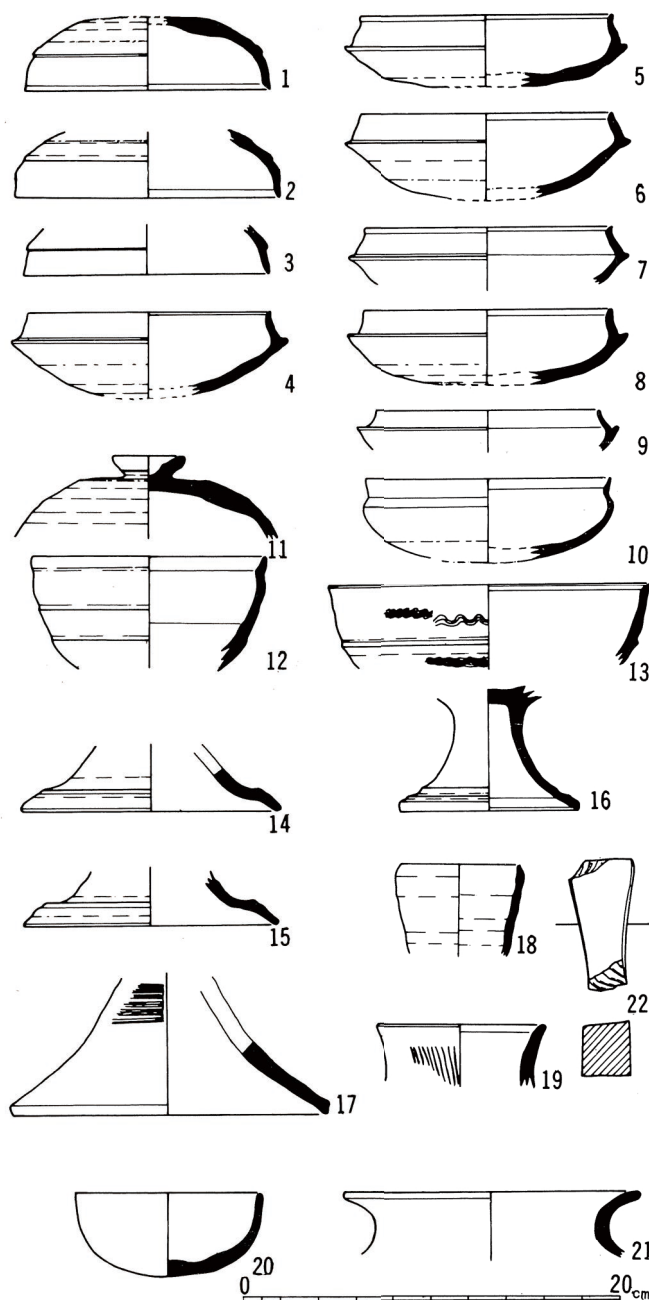
杯 (4~10) 口径12.2cmと小ぶりで丸底のもの(4)と、口径13.2~13.5cmで平底のもの(5~8)は、短く水平に伸びる受部に内傾するたちあがりをもち、口縁端部で外反する。口縁端面は、内傾する面をもつ。底部の $\frac{2}{3}$ ほどをヘラケズリ、他をナデで仕上げる。暗青灰色を呈す。9は、口径約12cm。小さい受部に短いたちあがり強く内傾する。端面は、丸くおさまられ、薄手であ



土師器碗出土状態



石敷近影

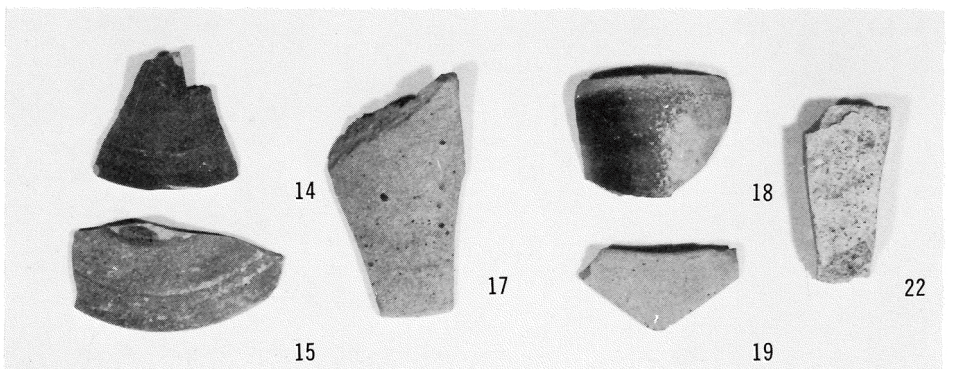
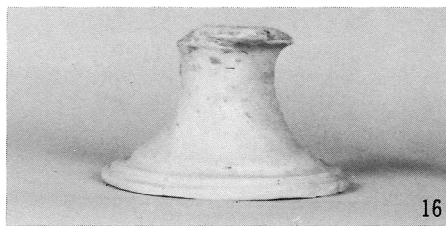


出土遺物実測図 (1:4)

る。暗青灰色を呈す。10は、丸い体部に短い口縁が外傾する。口縁端部は、薄くつまみ出され、端面は丸い。体部下半はヘラケズリ、他をナデで仕上げる。黒色を呈す。

高杯（11～17） 11は、有蓋高杯の蓋である。丸味をもつ天井部に中央が凹むつまみが付く。天井部の偏平部とつまみをナデで仕上げ、以下をヘラケズリする。黒灰色を呈し、2mmほどの砂を含む。12・13は、無蓋高杯の杯部である。12は、口径のわりに深い杯部をなすものと考えられ、2つの段をつくる。口縁部は、内弯し、端部はつまみ出される。13は、口縁部と底部をつまみ出し凸帯でわけ、口縁部に波状文、凸帯直下に簾状文を施す。口縁端面は、内傾する面をもつ。

脚部には、短脚で長方形の透しをもつもの(14・15)、短脚で透しをもたず柱状部をつくるもの(16)と、長脚のもの(17)がある。16は、柱状部内面をナデで平滑に仕上げる。灰白色を呈し、焼成が不十分なようである。17は、ゆるく外弯して開く脚部で、端部が僅かに肥厚し、直立する面をもつ。長脚二段透しのものであろうか。長方形の透し横には、平行するカキ目が施される。暗灰色を呈し、2mmほどの砂を含む。



出土遺物（1:3）

壺(18~19) ともに口縁のみである。18は、口径3.5cm前後。やや外傾する口縁部をナデで仕上げ、器面に凹凸をのこす。黒灰色を呈す。提瓶の口縁であろうか。19は、口径9.1cm。外反気味に直立する短い口縁のものである。口縁直下に粗いハケ目を施す。暗灰色を呈し、細砂を含む。

2. 土 師 器

椀(20) 口径9.8cm・器高4.4cm。直立する口縁部は、丸底の底部へ続く。底部内面は、ロク口水挽時のような凹凸をのこす。また、底部外面は、横方向に数回のヘラミガキが丁寧に行なわれ、口縁部はナデで仕上げる。これらの調整手法は、須恵器の技法と異なるところがなく、須恵器短頸壺の蓋の生焼きであるかもしれない。しかし、胎土、焼成に疑問がのこり、ここでは、土師器椀としておく。淡褐色を呈し、2mm粒ほどの砂を多少含む。

壺(21) 大きく外反する口縁をもつ。端部は、丸くおさめられ、水平に外を向く。褐色を呈す。

3. そ の 他

砥石(22) 現長7cm。断面は、方形を呈し、三面には、明瞭な使用痕をのこすが、一面のみ未使用である。

V 結 語

塚越3号墳は、長径8.5m・短径6m・高さ1.5m以上の墳丘をもつ古墳である。主体部は、ほぼ南北方向をとり、木棺直葬に類するものであろう。主体部における副葬品はない。また、主体部と同一面で検出した石敷は、人為的なものであり、主体部と同時期であろう。そして、遺体を墓壇内に安置した後、石敷を中心として埋葬儀礼が行なわれ、その後更に盛土を行なったと考えられる。また、主体部確認面で認められる封土の水平な堆積は、墓壇を墳丘上部から掘込んだのではなく、遺体安置後、再び盛土したことを示している。

墳丘盛土から出土する遺物は、塚越遺跡のものが混入したとも考えたが、主体部確認面で出土するもの(5・6・9・10・11・12・16・17・20)が多い。しかも、それらの土器は、完形にはならないまでも、同一個体として復元されるもの(5・6・10)もあることから推して、埋葬儀礼に使用されたものと考えた方が適切であろう。また、主体部に副葬品をもたないことは、この状況と表裏一体をなすものとも考えられる。

埋葬時に何らかの葬送儀礼が行なわれたことは、容易に想定されるが、その内容が如何なるものであったかを考古学的に究明することは難しい。後期古墳の場合、墳丘頂・墳丘裾・横穴式石室前庭部などで同時期の土器を出土することは多く、墓上祭祀・墓前祭祀の挙行が想定されている。これらの類例の多くが、埋葬時或いは埋葬以降であるのに対し、本墳で想定したものは、埋葬と同時に挙行されたものであると限定し得る。この種の類例もいくつか知られており、管見したものに丹切7号墳がある^⑦。丹切7号墳は、箱形木棺を内部主体とするものであり、棺内には、刀子1本、鉄鏃14本が副葬されるが、土器を副葬しない。しかし、棺の推定天端位置の屍体の足

部分の直上ちかくで須恵器甕・壺・提瓶・杯片が破碎された状態で出土している。また、棺上に置かれたと推定される甕は、丁寧に口縁部を欠いた状態で出土している。主体部に土器を副葬しないで、棺外若しくは墳丘に供膳用の土器が破碎された状態で出土するといった点は、本墳と相通じる点がある。土器を意図的に穿孔・破碎する風習については、いくつかの考えが示されている。^⑧ 本墳では、その状況が必ずしも明瞭でなく、土器が破碎されただろうという推定にとどめておきたい。

尚、埋葬の時期については、須恵器の形態上、『陶邑古窯址群Ⅰ』^⑨のⅡ期のT K10～T K43のものに比定でき、6世紀中葉頃と考える。

三角州性扇状地は、弥生前期以降伊勢湾西岸における一つの中心地として発達してきた地域であるが、古墳時代には、この地域の中心は鈴鹿川中流域の国府周辺へ政治的結集をみる。そして、この地域は岸岡山丘陵を中心とする一つの小地域的文化圏を形成していく。塚越古墳群は、立地・分布の点から岸岡山古墳群とは、やや趣を異にするものであり、歴史的 position を再検討せねばならないであろう。

(駒田利治)

註

- ① 赤嶺秀雄 「鈴鹿平野の地形と地質」『上箕田』 三重県立神戸高等学校 1961
土地条件図 「四日市」(1/25000) 国土地理院 1969
- ② 昭和53年度県営圃場整備事業により、三重県教育委員会が発掘調査を実施した。
- ③ 昭和52年度県営圃場整備事業により、三重県教育委員会が発掘調査を実施した。
- ④ 仲見秀雄・真田幸成・大場範久 『上箕田』 鈴鹿市教育委員会 1970
- ⑤ 谷本鋭次 「鈴鹿市土師町・土師南方遺跡」『昭和47年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』 三重県教育委員会 1973
- ⑥ 仲見秀雄 『新編 鈴鹿市の歴史』 1975
- ⑦ 堀田啓一・菅谷文則他 「宇陀・丹切古墳群」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第30冊 奈良県教育委員会 1975
- ⑧ 亀田博 「後期古墳に埋納された土器」『考古学研究』第23巻第4号 1977
桐原健 「古墳出土の大甕」『古代文化』第23巻第11号 1972
- ⑨ 田辺昭三 『陶邑古窯址群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ 1966